

(最終講義)

浄土学について

高橋 弘次

1 はじめに

失礼致します。私の「最終講義」(平成十七年一月十九日)ということ、こういう…お集まりを頂いたわけ
ありますが、この題は「浄土学」という…。本来なら「浄土宗学」という風に申し上げるべきであつたかと思いま
すが、現在佛教大学では「浄土学・仏教学コース」という表現が一般化しましたので、あえて「浄土学について」
と題して頂きました。

2 資料説明

お配りした資料のですね、ちょっと説明を致しますが…。10枚ほどのコピーでございますが、これは今から約30
年ほど前に書いたものの一部であります。『改版増補法然浄土教の諸問題』(以下同じ)という本を約30年前に出し

「高橋弘次教授 最終講義」講義録 「浄土学について」

ましたが、その時にこういうのを入れたわけでございます。これはですね、「宗学の学問的性格」というテーマの元に書かれた10枚の原稿でございます。で、本来は私の『法然浄土教の諸問題』という本の最後のチームと言いますか、チャプターで「第6章 浄土宗学の諸問題」という、約80ページほど書きました。その中の一部、10枚ほどのものがございます。ただ、これは「浄土学という、あるいは浄土宗学という学問はどんなものか」ということを論じたわけでございます。「どうして、こういうものを今更論じたのか」ということにつきましては、また申し上げますけれども、いずれにしましても、その場合ですね、「宗学の学問的性格」という、このテーマについての論述でございます。

そして、もう1枚ございますが、これはですね——1枚だけのものですが——最近まとめて出しました『佛教余談』という…。その中に、学生さんにですね、「仏教の研究のあり方の、大きく二つのあり方がある」ということを申し上げた、その文章が初めにあります。それから、その後半に「浄土宗学」とありまして、「領受開顕学」なんていう様な、私自身もあまり聞いたことの無い表現なんです。が、「浄土宗学」といってたらこういう範囲を勉強するんだという、「分類表」…、が出ております。これは、私の原稿じゃ無いんです。藤原了然というですね…、今から30年ほど前の、学長をなさっていた先生が亡くなった後、『浄土教思想論攷』という本…「遺稿集」を出しましたが、その中にですね、こういう表を作っておられる。もちろん、これに対する論証もなさっておられるわけでありますが、「分類」としましては分かり易いと思います。そういうので、これをここへ付けさせて頂きました。もう一度申し上げますが、藤原了然先生の『浄土教思想論攷』の181頁〜182頁に関する、この表でございます。

したがしまして、私が今日「浄土学について」というのでお話をさせて頂くのはですね、ここに(1)(2)(3)(4)とありますが、これはご覧頂いたらほぼお分かり頂けますので、少し…、この他のことも少し申し上げたいと思うのであり

ます。ただ「浄土学」ないしは「浄土宗学」についての論考というのは、実は割合あるんです。それはですね、一番後ろのノートのところでありますが、ここへ16ほど出してあります。その(4)のところに「とくに現代における諸学との関係において浄土宗学を論じたものとして：」とあります。諸戸素純の『法然上人の現代的理解』以下、ずっとですね、ありまして：、随分ございます。で、今紹介しました藤原了然先生の『浄土教思想論攷』は、ここに入っております。したがって、随分とこういう論考はあるんでありますが、それが学術誌でございまして、一般に御理解頂いていないという恨みがございまして。

いずれにしても、こういうものを読みまして、私です、思うところを書いたというのが、この10枚ほどのコピーの内容でございます。

3 論述に至った経緯

まずですね、申し上げておきたいのは、何でもこんなことを書くのか：分り切ったことなんでしょうが：。それは「浄土宗学」という：。つまり、日本の仏教は「宗派仏教」なんて言われておりますから、その宗派仏教に携わっている人に対してですね、「あれは学問では無い」という批判がちょうど30年前には随分ございました。

その先頭を切られたと申しますのは、京都大学の岩本裕先生という方です。宗学に携わっている者に対して：、「そうがく」（僧学）という言葉を書きだすね：。使われてるんです。いわば、非常に悪く言えば「程度の低い学問だ」というのです。批判が随分ございました。もちろん、岩本先生だけじゃございません。あえて名前をお出しするわけがあります。つまり「浄土学」とか、あるいは「真宗学」だとか、あるいは「真言学」だとか、各宗派

にございます。その学問をです、僧学とおっしゃって、まあ言ってみれば、これは「一般に通用しない」といった様なご批判が出て参ったんであります。で、今一つはですね、各宗派の中で、やはり「この自らが信ずるその宗派の教義を、論理的にきちつと構築しろ！」という要請もあるわけでございますが、あまりにもこの外からの批判というのは、キツウございました。

私は、今ご紹介頂きました様に、初めのうちは「仏教学」というですね、勉強をしたわけでございます。特に「初期仏教」をやったわけでございますが、その後、大谷大学を辞めまして、知恩院の中に「宗学研究所」というのがございまして、そこで5年間しばらくしました。まあこれが私には身に付いたわけで…、以後、浄土学を勉強したわけでございます。批判と同時に、この「宗学」というですね、どの宗学も同じと言えは同じであります。宗学の学問的「位置付け」とでも申しますか、「ポジションがどこにあるのか」ということが、私にとりましては随分問題になったわけでございます。まあそれをキチツと押さえないければ、自分のやっている、今からやろうとしている勉強のですね、方向というものが曖昧になるというので、まあ随分と色々調べ上げ、またその参考にさせて頂いたのが、今申しましたノートですね、註(4)のところにある論文等を紐解きまして…。つまり、先輩の論文であります。そしてこういうものを書き始めたんであります。

4 宗学研究の二分類

特に宗学のポジションなんでありますが、これがハッキリしない限りですね、どうも落ち着かないと言いますか、まあ色々なものを見て参りました。特にこの宗学の、また「今日的課題」とでも申しますか…。宗学というのは「

宗派の学問」であります。それは同時に自らの信仰を土台として、更に今日的課題とでも申しますか、今の時代に沿う「一つの説き方」と申しますか、あるいは「論理的な構築」というものがあつて然るべきなものであります。そういうものが簡単に口で言えますけれども、実際にそういう今日の課題に対応するものがなかなか出てこないということもございます。したがって、この…なかなかその位置付けと言いますか、学問上のフィールドの位置付けというものが非常に難しい。

そこで、少し別の方向と申しますか、つまり宗学の中というよりは外からですね、少し見たというのが、今ここに——403頁のところであります。比較宗教学とか、あるいは宗教社会学、こういうものを——403頁の後半であります。が、そういったものを——体系付けたワツハ (Wach) という人ですね、ものを見る。この中ではですね、つまりヨーロッパ、アメリカ等でおきましたは、この「宗学」はイコール「神学」という…、セオロジー (Theology)。直接神学に関わらないで外から論じる「宗教学」という——日本宗教学会というのもございまして、大きい学会です。よ——その「神学と宗教学との関わり」と申しますか、そういったものが、どう区別して、どう位置付けられるかという、その論述が実はあつたんです。そこから少し紐解くとも申しますか、理解を求めていったわけでございます。

ここに書いておりますが、神学というのはテオロジー (Theology) って言うんですか、セオロジーって言う…。テオス (Theos) っていう神様の論理学で…、まさに神学なんです。これは、つまり「私が信ずべきものは何なのか」というテーマの元に勉強を進めている。一方、宗教学はですね、「そこに信じられているものは何か」といった、いわば客観的のものを見ていくという、つまり、第三者的に見ていく。しかし神学は、「自分」と申しますか、主観的に見ていく。この違いをはっきりさせたのが、このワツハであります。そのワツハの考えを、まあ引

き継いでと申しますか…、この今の…、つまり仏教の、あるいは宗教の「科学的研究」…サイエンティフィック (scientific) ですね、研究と…。いわゆる、この「規範的」という言葉を使いますが、これは恐らく神学のほう…。

この二つ、分け方、これは岸本英夫というですね、東京大学の先生ですが…。顔にガンができて、そのガンを治すためにずっとアメリカにおられたという—アメリカにおられた時間のほうが長いんじゃないかと思われるほど…—日本宗教学会の会長さんもずっと勤められた方で、この方がこういう二つの分け方を出してきた。これは、恐らく神学と宗教学のそのワツハの分け方、それを科学的な研究、規範的な研究…。元よりこれは宗教に関わるものでありますが、そういうものを分けて論じようとなさったということでもあります。

5 科学的研究

科学的な研究というのはですね、これは「宗教現象が如何にあつたか」、あるいは「あるか」という見方に立って、いわば宗教に関わる客観的な研究のあり方であります。この研究のあり方の特徴と申しますか、「如何にあるか」という立場に立つということは、これはしたがって現象的であり、またその…それを実証するというものでありますから、価値論…「これがいいとか、これが悪い」といった価値論は入らない。つまり、価値中立的な勉強の仕方。これが、まあいわば科学的な研究の特色かと思えます。もちろん、こういう研究に基づいて仏教に携わるといふ、今の日本の「印度学仏教学会」という大きな学会がありますが、そこで研究されているのは、ほとんどこちらです。つまり、科学的な研究。もっと特徴的な言葉で申し上げますれば、文献学と言ってもいいですね。

この一枚の表がございませうが、この表で言うならばですね、「歴史宗学」という言葉があります。「浄土宗学」という、一番上にありまして、その下に3つ分けてございませう……3つ。その(一)の歴史宗学。ここに値するの、いわば宗学の中でも、こういう科学的な研究。つまり、ものの事実を押さえて、そして帰納的と申しますか……、そうした研究方法をとっていく。科学的な研究に携わることが多いんであります。最近、またそれに対する反省も出ておると思いますが、これがオーソドックスな仏教のあり方。岩本先生がですね、その「僧学」と言つて、宗学者に批判を浴びせたというのも、科学的な研究が、いわば中途半端だということでもつて、「僧学」という批判をされていっただけであります。したがつてですね、こういう「科学的な研究に立つ以外はダメだ」と言わんばかりのですね、まあ批判が出てきたので、概ね——まあここにおられる仏教に携わる先生もそうではありますが……、——つまりこの科学的な研究に立つと……。あるいは立たなければ、自分のまさに立つ場が無いという様な、一つの立場が出てきた。勢いそれは「僧学」つてのは悪い表現ですが——つまり、規範的な研究に対するですね、批判でもありません。またそこに携わること、まあ嫌がるだけでも申しますか、まあ敬遠するということ、そういう現象が出てきたんであります。

しかし、実際にそういうところに携わっている者は「これではイカン！」という、ふるい立つていく人もおりましたけれども、それはなかなか言うは易し……、その結果は出てこなかったわけでございませう。

6 規範的研究

そこで、404頁の中ほどであります。次の、「規範的研究」のことでございますが、ここに書いております。これは信仰・宗教そのものがですね、如何にあるべきかを問う学問であります。そのあり方は、したがって主体的な研究だと。つまり、自らの信仰・実践に関する研究であり、いわば人間存在、あるいは人間存在の質的な問題を取り扱う、求道的という言葉を使いますが、学問であると言うことが、できる。元よりこれは「自らの宗教が如何にあるべきか」という規範。これは恐らく神学ですね、ノルム (norm) という言葉から来てるんだと思います。——規範はですね、自らが信ずる絶対者との関わりのもとにですね、起こるこの経験あるいは宗教的事実を取り扱うのであります。絶対者というその神、あるいは仏を、無視する一方向的側面にその規範を求めることはできない、あつてはならない。すなわち、人間の主体的な営みの内面にですね、絶対者からの方向付け、これが規範だと。

こうなりますと、「一体それは、具体的には何だ」という様なことになるわけです。この規範的研究というあり方に属するものが、ヨーロッパ、アメリカでは、もちろんこの神学あるいは宗教哲学ですね。

そうすると「宗教哲学と神学とは、どう違うのか」という様なことになりましたが、まあそのことも少しは書いてはおりますけれども…。神学といつても、これはまたカトリックの神学、あるいはプロテスタントの神学、これも随分あります。こういうところへ入っていくのには、プロテスタントの、20世紀のですね、プロテスタントの神学で、一番とは言いませんが、ずいぶん影響力を持った、ポール・ティリッヒ (Paul Tillich) っていう…ドイツ人ではありますが、アメリカへずつといた人です。その人、私が学生時代に日本へ来て、私も京都大学へ講演を聞きに

行ったことがあります。その人のものに近づくことをですね、ずいぶん努力致しました。しかし、難しいんです。英語もドイツ語もあるようではありますが、私は英語のもので読まされたんですが、四年間しほられましてけれども。翻訳が出るかと思つたら、すぐその翻訳をですね、潰してしまう先生がおいでになる。つまり、『テイリツヒ選集』つていうのが10冊ほどありますが、この人ですね、この『テイリツヒの「組織神学」というのが「システマティック・セオロジー」(Systematic Theology)』…その全訳は一つも無いんです。訳して行けば、すぐまた批判をして潰す。今だに無いのであります。他のものは、ずいぶん…訳本は『テイリツヒ選集』として出ております。そういうものに、私は近付いて行つたんであります。

したがつて、その…私のここの、註の一番最後の所にもありますが、訳本は出ないけれども、随分と宗教に関わる人、あるいは哲学に関わる人が読んでるのであります。「システマティック・セオロジー」と言うんですが、私もそれに影響されました。それはそれとしましてですね——この神学、あるいは宗教哲学といったものが規範研究としてあつて、これに私たちは勇気付けられたと申しますか、宗学のありようですね、示唆があると見ていて、一貫して私はそれを勉強させて頂いたわけでありまして。今だに訳本が出ないように、「難しい」と言えばそれまでですが…影響を受けたということは事実でございます。

そこで、こんなことを何遍申し上げてもいけません。つまり、宗学が規範的な研究の領域に位置する学問だと。しかもこれは学問としてですね、位置付けられて、尚そのステータスと言いますか、そういうものは何も低いんじゃない、僧学という様な批判を受けるそれでは無くて、もつとですね高い立場にあつて、その位置付けがあるんだということを、見ていったわけでございます。

7 純粹宗義学

したがいまして、「それじゃあ、あなたの研究はどこから始まんのか」という様なことになるわけです。そのことを「宗学の規範的根拠」として、406頁のところ少し論じております。論じておりますが、これは一つ、今で言えば「キーワード」と言いますか、浄土学のキーワード…、「これは何であるか」というところがございます。もつと言えば、この表の表ですね、この1枚の表のところでは、真ん中の(二)のところであります。「組織宗学」という言葉…。テイリツヒは読んでいないはずですが…藤原先生は、こういう言葉を使う——これは「組織神学」にスツと当たる言葉でございます。ここには「純粹宗義学」とあります…横に。その範疇に入るものは、本質論、教判論、仏陀論、浄土論、本願論、機根論、往生論、とあります。7項目に分けてあります。これに対しては、これがいいのか悪いのかは別と致しまして、教判、仏陀…これは私に言わせれば仏身論と言ったほうがいい。阿弥陀仏論と言ったほうがいいですが…、それから浄土論、本願、機根、往生。これは皆キーワードであります。で、こういうものが、つまり組織的に論じられる。しかも、自らの信仰の上にこの論理的にこれが構築されて行くというものであります。

だから、浄土宗学というのは、ここに…この表で言いますと、(一)があつて(二)があつて(三)があるんでは無い。まず(二)がなければならぬ、(二)のために(一)があつて(三)がある、こういう風に見てみるのが本来ではないかと思ひます。これは藤原先生の、こういう分け方でございます。下の方にはですね、(一)の「歴史宗学」は「資料論」とあります。で、つまり「何のための資料か」というと、つまり「(二)のための資

料」でございます。で、この「組織宗学」の下には原理論とあります。まさに、これが原理であります。そして、その次の(三)実践宗学とありますが、それは応用論、これは「現実の教化」と申しますか、今の言葉では「教化」という言葉があります。実践に基づく教化の論であります。これも、いわば(二)の「組織宗学」があつての「実践宗学」であります。この(一)の資料論もそうです。

ちよつと余談になりますが、この歴史宗学という、この歴史宗学は、まさしく科学的な研究方法に基づかないと、これは明らかになりません。これに流されると言つたら失礼な言い方になりますが、これに偏っているのが現実であります。逆に、今の僧学と批判されるそれに対応して、この歴史宗学のほうにですね、大きなエネルギーが行つてしまつたという…。したがつて、組織宗学という、ここで言う場合の「組織宗学」、これが薄くなつてきた…、というのが今日であります。

そういう意味において、私は浄土学の、特に規範的な研究としての浄土学というものがですね、もつと勢いよく行われなくてはならないという風に、私自身は常感じておるわけでございます。

8 法然・聖光にみるポジション

この「組織的」と言ひましても、自分の主体をないがしろにしたものは一切受け付けないわけがあります。しかもそれは、自分の信仰するその絶対者からの関わりの方に元になんか論理的に構築されねばならん…ということ、先ほどから申し上げておるわけでありますが…。その一つですね、とらえ方に、ここに…407頁であります、『十二問答』という法然の中ですね、「この宗学を中心になるのはどうなのか」ということを少し言つてゐるんです。

「そもそもですね、浄土一宗の諸宗に超え、念仏の一行の諸宗に勝れたるということはですね、万機を撰する方をいうなり」と。「理観、菩提心、あるいは誦誦大乘、真言、止観等は、いずれも仏法の愚かになりますには非ず」と。愚かなものと言つてゐるのでは無いんだと。「皆ですね、生死済度の法なれども、末代になりぬれば、力及ばず」と。「行人の不法なるによりて、機は及ばぬなり」と。「時を言えば、末法万年の後、人壽十歳にいたり」と。「罪を言えば、十悪五逆の罪人なり」と。「老少男女の輩はですね、一念十念の類に至るまで、皆これ撰取不捨の願にこもれるなり」と。「故に、諸宗に超え、諸行に勝れたりとは申すなり」と。こういう様な、自分の信ずる立場からの論述がございます。

まあこの論述なんでありませんが、これは何も他の：諸宗のですね、行を否定してゐるのでは無いんです。みな勝れたもんだけれども、今ですね。したがって、これを我々は「時」と「機」と言うんです。これは時間というのを時、つまり「人間と時代」ですね、したがって「時機相応」という様な言葉がこつから生まれてくるんです。つまり時に適していなければならんし、自分に適していなければならぬ。こういうものを求めての、その学的作業というのが宗学だという風にお取り頂いたらいいんじゃないかと思つてあります。

この：明らかに、現実の人間そのものの実体を見届けた上で、万人救済の教えを絶対者「阿弥陀仏」の本願の中に見いだし、これを組織付けようとする立場を示すものと言へる。「浄土宗学における規範的な研究のありようだ」と私は申し上げるんであります。すなわち「あれ」か「これ」かという二者択一的な個人の宗教的な緊張状況から、「万人よし」、とうなずける救済の普遍性を浄土門、絶対者「阿弥陀仏」の本願の中に見いだして、そして本願によつて決定付けられ根拠付けられて、念仏の一行が選り取られていくという、そこを押さえるというのがまず第一であります。そして、現実の世界、「時代」と言つてもいいですが、そして「人間」とのですね、深く自ら自覚

したというか、あるいは理解したといえますか、そういう中に見いだしていくのが、この宗学の本来のありようではないかということをお願いしているわけでございます。

ところが、この宗学のありようというのはですね、古い時代から論じられているわけでありませう。——409頁のところですね——この伝統的な宗学のありかたにおいて、法然の考えを受け継いだ聖光房弁長という人がですね、「聖道浄土兼学」という言葉を使っているんです。つまり「宗学」という風に言うけれども、これは「自らが信ずる教え」ということでありますが、それだけでは無くて、この仏教の…中国でこれは分けるんですが、聖道門の教え——自力と言ってもいいんですが——あるいは浄土門というですね——これは他力と言ってもいい——この二つに分けていく立場が中国でございます。それは6世紀に、もうすでにこういう考えが出ておるわけでございますが、「どっちに立つか」っていうですね、そういうことをこう言うわけでありませう。二祖、法然上人のお弟子の二祖聖光房弁長という人は「これは兼学でなかつたらならない」と。つまり両方ですね、勉強するうちに、宗学のありようというものは分かってくる。これを「兼学」という。つまり「広く学べ」っていう…。だから、単浄土の人、単聖道の人は分からない。これを二つ兼学してこそ、本来の立場——ということとは、我々は宗学と言うけれども、他の教え、他の学問を分かかってこそ——つまり浄土門の、価値性というものが出てくるんだと。自分が「これだ！」と言って、浄土門だけに沈んでしまえば…、つまり「井の中の蛙」という言葉がございますが、井の中の蛙的存在になりはしないかと、言っているんです。これは、法然の後を受けた者としては、当然こういうことが、大事かと思われませう。

したがって、こういう意味では、つまり「過去のもの」と言ってもいいんです。伝統的なもの、少し立場を変えて言うならば、411頁のところですが、中ほどに、相承的なもの…、私はトラディショナル (traditional) なもの

いう…、あるいは発展的要素、これはエボリユーシヨナル (evolutional) というような言い方をしますが…。これがですね、キチツと整って分けて、この発展的な内容を見いだしていく立場でない限り、どうにもならないという考え方がある。これは…、少し言い換えたということにもなるかと思えます。

9 相承的内容と発展的内容

「浄土学の、あるいは浄土宗学の、まさしく浄土宗学的なものというのは、それじゃあ何なのか」ということを、412頁の少し行つて段落のあるところでありますが…。相承的内容と発展的内容との両者は、それぞれの内容としてあるべきではなく、両者常に関わり合つてあるべきである。それが他ならぬ宗学という作業である。浄土宗義が伝承されているということでもある。もし前者の相承的内容のみによるならば、それは単に口伝とか伝法とか、その繰り返しであり、発展的内容の無い単なる伝承に過ぎない宗学となる。後者の発展的内容は、あくまで相承的内容に基づく性格のものであるから、それは単なる伝承でも無く、また単なる発展でも無い。いわば発展的内容ともなう複合的伝承と言うべきである。ここに宗学する所以があるんだと。こういう風な言い方を、これは私がおけるわけであります。

こう…見ますとですね、これをキリスト教のほうの神学なんかの立場で言いますと、「伝統的なものを守る」を、これをケリグマティック・セオロジー (kerygmatic theology) なんていう様な言い方をしておりますが、これは…しかし、単なる歴史宗学でも無ければ、教化を研究する、教団を論ずる実践宗学でも無いと。こういう風に書いております。これは、つまり法然の教えをもつて、他の諸思想と、あるいは世界のあらゆる思想・宗教と、まあ

「対決」という言葉はあまり良くないですが、対応し、その教えの中に今日的価値を見いだすべく価値体系を打ち立てると言うことが、宗学だろうと……。言い換えれば、今日の宗学は、権威主義的な歴史宗学にとどまること無く、今日的状況を踏まえて、他の諸思想との対決を行う。——このアポロジエティック (apologetic) という、日本語に訳せば「護教論」とか、「護教的宗学」という様な言葉になるんですが、それはちよつとマズいんで「理論宗学」と、言っておきたいんです。——つまり、アポロジエティックな、その…セオロジー。つまり、宗学でなかつてはならない…と思います。

つまり、またそれが伝統的宗学にあまりにも固執しますと、今日的対応ができなくなります。したがって、そこに生まれてくる、「護教」っていうのはよくないですが、理論宗学が基本的になければならない。佛教大学の浄土学に携わっておられる先生沢山おられますが、ここに中心があるということの認識がありません。それがですね、インド学仏教学と言ってもいいですが、そこら辺から批判されて行くのです。科学的と言いながら、科学的では無い…いうその研究に批判を、与えてしまう。したがって、それを避ける…。したがって、中身はですよ、伝統的宗学と言って、実はそうで無い。そのミノに隠れる様な、一つのありようが、指摘されはしないかということを私は申し上げるんでございます。

10 宗教的学問行爲

だからその学問というものはですね、もう一度申しますが、この表で言うならば、組織宗学、純粹宗義学とありますが、それは、私は単にケリグマティック (kerygmatic) というか、伝統宗学という様なことにとどまっては

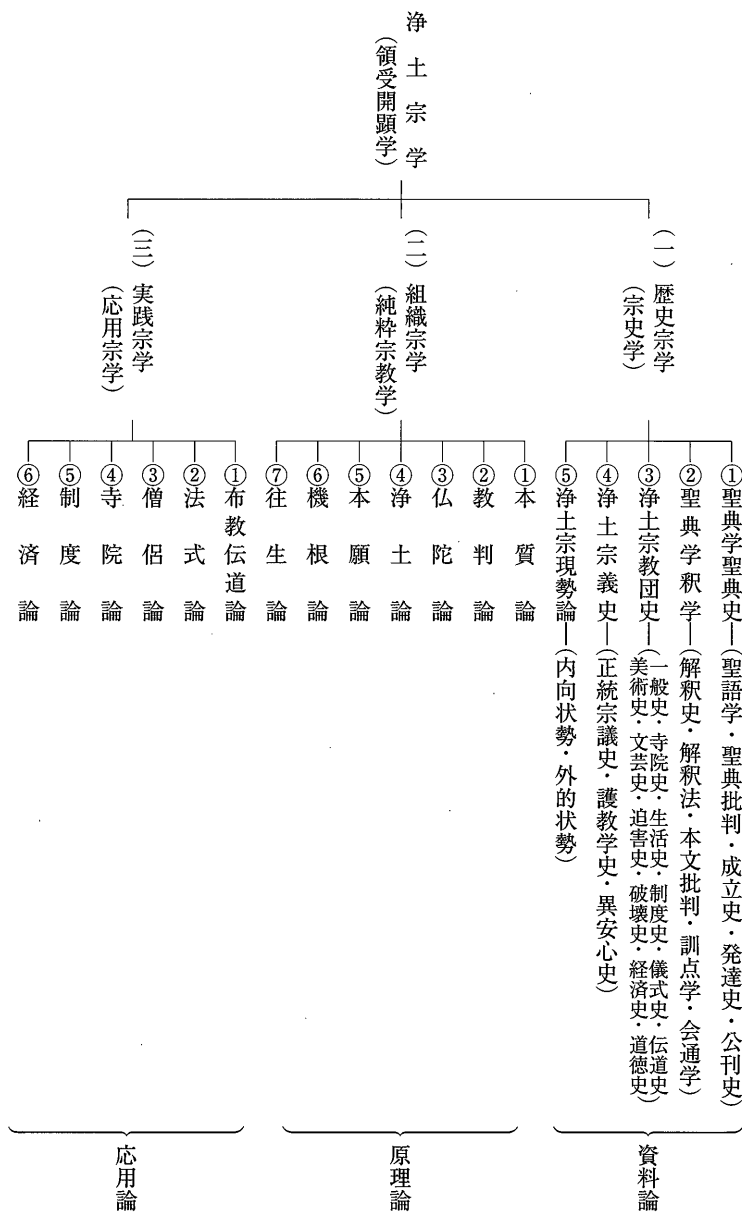
ならない。更にこの理論宗学という、いわばアポロジエティック・セオロジー (apologetic theology) という風なところの理論宗学にその場を置かなければ、我々はその立場は無いんだと、こういう風に私は思うんであります。したがって、そうした今日的と申しますか、宗学においてはですね、宗学が学問サークルというか、学問の領域に属するものであってもですね、単に学問のための学問——まあよくあります。私は学位を取るために勉強してるとかね、そういう様な学問があります。あるいは……つまり、学問のための学問といった量的な世界にとどまるものであつてはならないんであります。宗学はいわばですね、その時代の人間存在の質的な転換を求める宗教的学問行為……、こんな難しい言い方をしますけれども……、厳密に言えば、そういうことになるんではないかと……。もう一度読みますが、「宗学は、いわばその時代の人間存在の質的な転換を求める宗教的学問行為」……。「そんなものは簡単にできるか」とおっしゃるかも知れませんが、「宗学はそういうものを求めているんだ。そういう行為を求めているんだ」ということは言えるんじゃないかと思ひます。

また言い換えれば、宗学は……、したがって学問の領域に一応属しながらですね、しかも学問の領域を出るといった性格のものであると。したがって、宗学は学問の領域にありながら、そこにとどまること無く実践教化への領域へと向かうと同時に、主体的な実践的立場から学問の領域に入るといった性格を持っているんだと。こういう、ことが言える。

したがって、この表をもう一度、最後の表であります……。つまり「組織宗学」とありまして、その次は「実践宗学」とあります。「応用宗学」とも書いてありますが、こういうものが、ここから展開するものでなかつてはならない。こういうことではあります。

11 おわりに

最後でございますが、このことはですね、414頁…、いよいよ最後でございますが…。宗学の規範的根拠が単に宗学を行うものの側にあるのでは無く、宗学を行うものの主体的内面において必然的に絶対者の側からの方向付けにおいてあるという宗学の基本的性格からですね、見ても明らかであると。こういう風に、私は言うんであります。したがって、宗学がですね、経験的帰納的…、これは、こういう言い方、これは神学で言うんでありますが、あるいはまた形而上学的演繹的…、これも神学で言うんでありますが…。そういう場合においてもですね、やはりノルム (norm) という規範があつて、そこから実際に受け止めた内容が言葉になつて論述されるのでなかつてはならないという、ことが言えるんじゃないかと思ひます。



※この表は藤原了然『浄土教思想論攷』一八一〜一八二頁のもの。